



長唄汁一本

振擲 延虫

近江文庫
文庫 6
1474



男

三才

四

五

六

七

八

相模

男舞



秋光のかげも明らけくうへちか
男まはでなうはさる月原のゑぼを
かにかかぢなるるはあがもむつ嶋
うたふやあしとけ姫松乃代もけけう平
ちやふる事を今あつかさのかさる月
我らうでたれかうふなあせとあ子え
しなとさるし川のあさい心を

男舞
三
相模
延
虫

らちや白にまいてはななめしき事なりとす
き^{しやう}か^{しやう}げ^{しやう}ぞ^{しやう}顔^{しやう}を^{しやう}伸^{しやう}ま^{しやう}て^{しやう}の^{しやう}す^{しやう}と^{しやう}く^{しやう}
や^{しやう}ら^{しやう}あ^{しやう}ん^{しやう}き^{しやう}ら^{しやう}ら^{しやう}の^{しやう}見^{しやう}る^{しやう}目^{しやう}も^{しやう}た^{しやう}が^{しやう}
と^{しやう}顔^{しやう}に^{しやう}の^{しやう}か^{しやう}の^{しやう}の^{しやう}す^{しやう}が^{しやう}に^{しやう}は^{しやう}ら^{しやう}の^{しやう}い^{しやう}く^{しやう}
一^{しやう}か^{しやう}ら^{しやう}で^{しやう}す^{しやう}で^{しやう}に^{しやう}を^{しやう}や^{しやう}ら^{しやう}し^{しやう}を^{しやう}う^{しやう}く^{しやう}は^{しやう}顔^{しやう}
を^{しやう}め^{しやう}ぐ^{しやう}ら^{しやう}す^{しやう}衆^{しやう}の^{しやう}袖^{しやう}か^{しやう}す^{しやう}は^{しやう}よ^{しやう}ぎ^{しやう}の^{しやう}ち^{しやう}り^{しやう}
を^{しやう}は^{しやう}て^{しやう}て^{しやう}の^{しやう}の^{しやう}み^{しやう}さ^{しやう}い^{しやう}は^{しやう}ら^{しやう}見^{しやう}る^{しやう}く^{しやう}の^{しやう}
ま^{しやう}に^{しやう}く^{しやう}の^{しやう}の^{しやう}し^{しやう}ら^{しやう}に^{しやう}ゆ^{しやう}か^{しやう}か^{しやう}の^{しやう}か^{しやう}の^{しやう}か^{しやう}の^{しやう}

あ^{しやう}く^{しやう}な^{しやう}が^{しやう}ら^{しやう}に^{しやう}あ^{しやう}は^{しやう}ら^{しやう}ー^{しやう}や^{しやう}か^{しやう}ら^{しやう}が^{しやう}
け^{しやう}て^{しやう}み^{しやう}を^{しやう}う^{しやう}さ^{しやう}の^{しやう}ア^{しやう}ー^{しやう}ら^{しやう}を^{しやう}あ^{しやう}ー^{しやう}と^{しやう}く^{しやう}
の^{しやう}せ^{しやう}め^{しやう}ら^{しやう}い^{しやう}ち^{しやう}を^{しやう}有^{しやう}に^{しやう}国^{しやう}に^{しやう}さ^{しやう}い^{しやう}は^{しやう}に^{しやう}ぬ^{しやう}
男^{しやう}中^{しやう}と^{しやう}む^{しやう}ね^{しやう}で^{しやう}う^{しやう}ら^{しやう}て^{しやう}あ^{しやう}ー^{しやう}は^{しやう}ら^{しやう}あ^{しやう}て^{しやう}
と^{しやう}て^{しやう}か^{しやう}や^{しやう}ら^{しやう}は^{しやう}あ^{しやう}た^{しやう}と^{しやう}き^{しやう}あ^{しやう}す^{しやう}ら^{しやう}に^{しやう}そ^{しやう}ら^{しやう}に^{しやう}
た^{しやう}い^{しやう}ゆ^{しやう}あ^{しやう}て^{しやう}む^{しやう}に^{しやう}て^{しやう}ー^{しやう}に^{しやう}ら^{しやう}を^{しやう}ま^{しやう}ら^{しやう}せ^{しやう}
む^{しやう}い^{しやう}い^{しやう}が^{しやう}な^{しやう}ま^{しやう}い^{しやう}と^{しやう}は^{しやう}せ^{しやう}め^{しやう}あ^{しやう}ら^{しやう}い^{しやう}で^{しやう}
あ^{しやう}ら^{しやう}ぞ^{しやう}い^{しやう}な^{しやう}て^{しやう}あ^{しやう}た^{しやう}ら^{しやう}を^{しやう}よ^{しやう}の^{しやう}中^{しやう}に^{しやう}

飛いぬすいせんむらざれ梅のぬめ
さつとにたがいのむねをいふしをい引
てはまゝのむねのけふちよと阿さうら
ぬさぐん花のふつゝいハツてか阿らうと
まゝよふらいはちやの花ちうつむ
しらみくしらがかんぐんぐんつばき
木々にも六つの花やさくらん

對面春駒

めでたや〜春の初の春駒なんぞは夢に見
てさよよいとや申す。〜オ〜それそれよい振
袖の梅と櫻の其中々は姿も年もあけけうもつみなん
なり可愛と申す。〜やんとくしき出立はる。大よせなく
の、其かりくらに伊豆と相模の殿さん方はあゝはやぎ〜
た瀧口ほうでう。かけが峠におならびあれば廻る盃よく中
村と名に大場の朝歸り。降るは時雨か村雨月毛。〜とく
〜めーたる。駒の手綱のいろは。赤澤山〜ちくの竹馬。〜

伊豆と相模

相模延虫

く、我々の馬、さきのけく。のけく。駒が勇めは心も
いり。響の音がらんわら。ひづめの拍子がうつとんじ
と。壽き祝ふ花の袖。は、い、こ、ほれ、咲く梅の枝移り。と驚
の。響る聲の拍子を揃へて七軒なぐなり。それ人目の白馬の
節會。春の小馬のいささよく唄いはやと祝しけり

神と君との道すゝまゝ。治まら國ぞ久し。若葉摘むとそ
袖ひきつれて。思ふ友どもいの中。中のよいのも

春は梢も一様。梅の花を殿づくり。めづる敵はかたきとは。
いゝやかくは驚の。おゝゝゝうはけきやう。くんと轉るる。
あはみも知らぬもけら。そらうそふいて飛ひかゝつて。
気をしづめてうちはや。初若水の若菜の御祝儀。戀の假名
文いつ書き習ひ。誓文命も。おみかせ候べく。かゝる留袖
の

志賀山三番叟

偽紫のなぐに。及ばぬ筆に寫
絵も。池の汀の石亀や。ほんゝ鶉
のもね鳥飛び。とつばいにとり
りぐたき。花のお江戸の沸息負
を。頭も重き。帽子。さつばら

おのが古郷へ。綿を着なす~~踊~~^{ち取}
ま。そらがまゝも五とせのけふ
を^{祝ひ}名残にさうらふよ。天の岩
のナ神樂月とて。祝ふはん~~具~~^{その}
年も。五つや七つ三つ見しよ。

縫の模様。のいとさふぐに。竹
に八丈代の妻こめて。松の齡
のひく萬代も。暫らぬふり
鶴と飛。ぴんともけし目
出たいな。海老ももぐりし腰

のちめ。寶書ししや寶舟。や
ら〜めぐたいな。四海波風
流りて。常盤の枝もくこの
葉もやる。えいさら鯉の滝
のぼり。牡丹も唐獅子唐松を。

見事に〜。さつてもん事に
心を盡し。はまぐりあるい
子の山袖。着せてたつて春
うめ。肩車ゝふんのせそ。家
せてもぬらの氏神もうで。さ

ねが鼓のてんつくでん。笛のひ
じきの音もさへあつた。やいさ
目えのちほら。中のか
中娘と。ひいろう長者が。嫁
ふいとあつた。藤内沼郎

おどろけに集つて。エー
えつちらあつちら。わせられた
ので。其意に任せようした。さ
て婚禮の吉日は。縁をさだん
の目をす。増。荷物はな

吾妻八景

實^けはゆたかなる日^ひの春^{はる}のけ
れたものばつぐにみ江戸
むさしの明^{あけ}ほのなめや
あ^{みち}上^{かみ}あ^ある花^{はな}のふた目^めも
そである

三
和
草
野
路
長
一
百
一
十
五
相
模
延
安

うつゝ所ざくら御殿山
なまむとむすのめかうふ
ひその中なるのめざと
かしまえふあを簾のむ
ふ福うふうこのこゑる
濃りたるるあるこれ人

不とさあを川音かけた
う羽衣の松わ天女のたむ
むと三徳またとて後河
の名ある虎のよせいのやた
うく見お海すきう乃代あり
目とせあふたるあめだ並法

のかたへの宮戸川なぐれ已たり
又い後いられ花のあはれの浦^{あさき}
や^み内寺せよ^み松にうられ男は
いづちへこれー矢^や大^おきりん日
はあたるつぢうられま川^をきん
ぎーふすぢみちれーふは

ゆふみえけつふも^や矢^な立のあ
と田川目^ははく秋れるき
ふむやうーやよい紙さぬ
た^人忍^{しの}ぶ^りきりみたる^うす
の^い玉^{たま}つきに^はなよとさうんぬ
うーめをさうのこーは

月さほふ福しいいおへる
 と衣紋坂^{えもんざか}みせあがぬに
 元美よぞらねてつひ飛^みは
 けのあされぬきほり
 くなぎけのぬるこひのあに
 志よもあのが園乃ちあ

によきふいとたけのあらぐや
 きうに^{しま}のたかたなほ^ね
 こりせは^たかくの^ね者ともよ
 東^と叡^ゑより^を風^{かぜ}がふ^{はな}る花
 もみぢ^{こは}あは^さて^{せん}の
 ち^みら^{かた}ひ^らみ^ら天^{てん}の^み御^み

ふひけのふとりのたふとくもあ
らうやんハツの右所

手習子

今もさうれ花の山まゝも
みずーの花のかげのぬ泳
のかはゆらー遅様まゝ

つぼみなり花娘寺子もとりれ
みちもなるとみもな色様
ひな草結ぶ嶋田わけは
ないやら戀ぢぢらかぬい
上へるもけなへもさうし
きらめん結びるもさうし

あやいの帯振の袂のふり梅
花のふ顔のいゝらーニッ文
字から書初てりんきはがし
角文字れすゝなびの一筋り
法師匠さんのおりあわりを
らんゝ意へはあぬらゝどぬり

はうめんちさふらぐとた
なんでも情なやあゝ
娘あいのむさふらゝあゝ
何とあはあゝなう目
あゝ娘娘々とゝゝんさ
あゝおゝあゝあゝあゝ

けふあふたゆみーうーきま
 のめともさーはあひるせぶふで
 戀ぢの法書なる妻の為と
 天神様へ願かけ梅をた
 ます明白わき一代ーともあす
 めいけ梅を梅をたます

めいはいはくサあは一代實らん
ふふふやいな品もよや諸る
れさへけり梢々の枝も移る
風も翅のむらめ梅と椿
の花笠おせそ詠尽さぬ
春うゝ

相模さが延み虫あま

在所なるも名所がゞゞ相模
女子の笑顔もゞや振袖の模様
は濱の貝つゞ目籠に拾ふ
みろふきのふりきけ見ればは
んゞと月も宿る武藏

野の空もひとつは契りもし
眺めは明かぬ景色かなよ君
の姿を見初めてひく袖貝を
打拂ふ戀は鮑あわいの片思ひあ
たゝ仇波櫻貝梅の花見其
身は粹な酢貝は男の心

三
相模延虫
はまのり

ちの姫貝一筋な女の心はう
ぢやないわいないつか逢瀬を
とふふ逢ふと離れぬ蛤の
其月日貝馬刀貝まてかいといふと頼
みの妹脊貝未と戀にはいつら
貝白も早西よ入相の極樂寺

此鐘の聲耳を貫くばかりなり
 由井が汀に寄する浪峯の嵐
 に揉み合せ寄する浪はとうく
 とどつと打つはさつと引く
 日本無双の名所や雪の下へと
 急に行々

指花柳壽輔
引手花柳芳次郎

連獅子

杵屋勝三郎曲
河竹其水述

夫牡丹は百花の王^う獅子
子は百おりの長とかや桃李
はあやう牡丹花の今も盛
うは咲みちる虎豹は芳らぬ
連獅子のたわむれあそび

4444444
上ニテ
スウニハイ

三

三

三

三

三

三

三

三

石の橋は是ぞ文珠のおほす
其の名も高き清涼山峯を仰
げば千丈のみなき龍は雲
よりおち谷を臨みばちひら
の底流はよひく松の風見
わたす橋は夕陽の雨後よ

えいびる虹に似たるを
渡るが如くなりけるけんその山
頭より強臆もあす親獅子の
めづみもぬかき谷あいへけお
とす子ぞはしめゆへおつ
と見えしが身をのりかひ

爪をけしそんかけのほろを又つ
まおろしつゝおとあんなけき心
の荒ぶるもほめんの花み舞
何ぞふ小蝶よ心やわらにて
花み何ぞはれ葉まゐるお
ひつおはれよねんあそ風よ

ちりゆへ花びらのひらるゝ
ひらるゝつばさをあひひともよ
おふぢちるゝに折から
笙笛琴箏篳篥の妙なる調舞
れ袖あそるゝのふかぐのみ
そん牡丹の英にあひみち

たいきんりきんの獅子頭え
 やばやせや牡丹ほろく
 人のすい、顕れて花に戯れ枝に
 伏すらびばるる上なきと王の勢
 いなびかぬ草木もなき時なれ
 や万歳千秋と舞納め

獅子の座もいそなほり

文久元年酉年五月吉日

花柳芳次郎名弘會延之節
發之

明治十八年六月二十八日
會延之節左之連名再補之
杵屋勝三郎二世代

芳村伊十郎	杵屋勝太郎	望月太左藏	芳村孝次郎
芳村伊四郎	杵屋小三郎	宝山左卫門	福原鶴三郎
松嶋市太郎	杵屋勝十郎	望月長左久	住田又兵衛
芳村芳三郎	杵屋勝四郎	藤舎芦舩	杵屋勝三郎
		望月太七	

御届 明治十九年月 日

編輯兼
出版人

本林本順三郎
浅草瓦町二番地

三枚子おろし

はまの松風

葉書の手摺

いさるい和邦も名も高き曾我の五郎
時宗がさが^{ちまか}沢浮れ鎧蝶も裾もすが
鶴の丸素袍の袖もかになで留らは
鬼久少林の形比奈もぬやと姿
女のように思髪ふのかいともあら

心もやうと引は時宗う日比乃
本望父の仇さまたげなすなと泣
きとげ廊れふれとは違ふよ
はなせとめたこいめとよいはねのゆき
雨のふのよいはさうやるふれ
そくまたあやんせ合起證誓詞は

うそいなりそもあれも誠は
もよ色ます花ながめそそいそ
そいそ其顔てふたひこといそ
ほたてきんすそそむいそいそ
も顔見やなぬ束と頼のあそ神
あそわきせりしは奈が力は素

袍の袖添てきよあそぬいそ海は
そ綾上下やなぐてかんせぬとそ
うそなかりそ

踏雪痕

同あふの雲はれやぬあほりよそ
あよあよー我があふそそ

三枚子おろし

踏雪痕

はまの松風

あけの恋風がけふもかきよ雪もく
つゝ思ひはあけゆきのちこそはふな
恋路と思ひ重なるはなをみせめ
いはしと夕暮よちゆくゆきはぬれ
路をのぞくしづるとかはぬ申おもひ
心のほろちもくちもくみづの筋よ

涙はちきりぬ神さきくら
みく初めはけふいそぐ
いともかぬていふき名なは
ほんみちなみちあつらふ
とけくあけつ流るるはる

三枚子おろし

馬サ母

はまの松風

はまの風

あけの恋風がけふはかき雪ふり
つゝ思ひはあけゆきのちこそはふも
恋路と思ひ重なるはなをみせめ
いはれと夕暮よちゆくゆきはぬれ
路のさよふとかはぬ^ゆき
心のしらぬもくちもくちみづの筋よ

恨のほかは白鷺は水まなれたる
いふもぬれさうとまゆもあわれは
なみだよかはくまも袖ほくぬ月か
げは思ふその夜のはなをすすめて
えんを結ぶの神さんよ取あげられ
さしあまる色香のまづやすみの浦

三枚子おろし 有
馬サ母
はまの風

空に霞波するも君は心は取もいふは
実よ誠と思はんせ繻子袴の心取も
主の心取もいふはあはれ思は
んせやほんも白雲の羽風雪散る
花のちりけきとみれど詠の雪をちり
なむ雪をちりやうなむからぬ恋はとこしほ

花のちりきの散るうはらもあき袖
やかきとやかきとさすなはらん
いづかきとやかけこいづらは
花見よじんせよ一山雪く匂
梅の雪がさかへ月日のあはれ
車笠もくさくさくさくさく

三松子おる庭

馬のけり

はまの松風

名のちゝとなむすもなはれすしましく
ふやんのやいはよ先立ちて此世をさく
つぎの山一の仲のうちはたうらや
地獄の名称をとく罪をたぐてえん
王の鉄ぶやうまはよととととと
ちくせろ申じやうちくく何は世

くはんだけせくはんち申のたいはひ
ももなくくく四方はむらがりて鉄を
やうあげるがけきがみをらし
あつちく三六時中に其の間をく追
廻りくついはは身はくくあはれ
み給ふが浮身語もなみどちうけり

三枚子なる証 有

馬サ母

はまの松風

三子

萬竹園

卷之四

...

72

24

+

204

風

乃幕の紋御願負頼みいげまうや
やんと居なうよ此舞臺我等も千秋
さむらはうおそえ千年のゑんじは
二つ枕に結んだりはゑ萬代と
かけし契りわ水ももらぬちかひよ
橋を渡すは何といふたらよめりやう

ついでいゝやうにあらは龍は水
絶えずあふせと松の葉れ色はかは
らじ只いまふもるやほんになじよ
の公羽のいぢりきはさうもせんざいなど
しく心のたけをいらばう明かし
て結ぶ妹脊山さてもよいし中

やましを天下泰平國土安穩今日の
御祈禱なりおきくよるるびほや
有明れ月の出はほに河もときがけら
の浪のさく打つや鼓の松吹風も
さくとおくともむなりく音も
ほふよのいふぬらん夜遊の舞樂

拍子をもろくして足拍子もろくして時も夜
明の鳥飛び袖をかへて面白や在原
や高天が原にすみずみの四社の御前で
扇は拾ぬたぬに扇の辻占はさうや
ほんかいなほはういしあんぞもや
うれふ四社の御田の苗代みに結ぶ縁

の種おろしきやほんかゝな結ぶと焼
しんそとちや焼さあ住吉さあれ
岸の姫松めでなきよけさあの舞の曲
さす腕には悪魔はあらをさむる
手には壽福をいづき千秋樂は民
をたて萬歳樂をいづきでたけれ

蜘蛛柏子舞

貞元 我君様はまづいせられませう

メメメメメ

貞元 ヤアいづきも怪しい女我君の御前は何用あつて

まのうでた

女 承りますれば頼光公は膝の二腰を御所持事

どうぞそれとあはせをせんこりませ

貞元 見せやうものでもいふが刀のゆらりと知つてゐるわ

女 甘きものは

の種おろしきやほんかいな結くま焼
しんきとちや焼さあ住吉さあれ

羽衣
つりや女諸國の名高きかぢの數々此場まにけり
てよあらし

貞光
我君の仰の如く刀のゆらゝ語すまゝ何と
女サアそれほなア

いそより代々のみのとらたつてする
かぢの道ひらく天國天の座さん
ぞくか太平地國のわいけんニホあま
る御代のらん寶ニホちはやうし
むのしより戀よかさはのうめ

にやいもの鳥はなやとふしつふふ
しものる羽せんにしつふふ
かねたももら詞よあらな
あつの中はなやとふちか
まも文ならぐとふとふふ
つう香ももら夢をさぐとふ

ふしぬる夜はあひといふふ
よかけしはなやとふふ
~~あ~~の~~な~~すか~~い~~は~~い~~さ~~う~~ながら
夜着させよしのあらはな
なみぶのしゆのおきわふし
さいはくしはくしはくし

三松子

馬の

すまの

かきうろ五行五射をかゝるの
槌文のすくゆき武のみだれ文武

貞光のつや何とす

女ハサ此花と

貞光何花とは

はえんがいあげど——

なほはたふものせうふやうへんあま

さゑどきわういらわう

は名よおふやもと鍛冶りけんめい

さくめいあ六百九十四うなる九

十四うは九十九夜ある夜もの夜の

さくめいいらふみざれ——わきものこ

名のうと和泉の加賀四郎さくめい

たけのこ
たけのこ
たけのこ
たけのこ

二道は二は
すゝもかゝもみよゝかきふす
はえんがいにけぞ
なほはたふものさうふもふ
なほはたふものさうふもふ

さゝききわういりわう
は名よおふやもと鍛冶りけんめい
さゝきいり六百九十四うなる九
十四うは九十九夜ある夜よの夜の
さゝきいりいりよみされ
名のと和泉の加賀四郎さゝき

三枚子ある

馬の

すまの

けみつ文字はうちちやに
仁王三郎あいは長門
ひさしさいもやかこ
あといあみの酒もほな
つなとちがきみばくさ
おころけるうちあまの

山女の同あつねおと直しの同あつね
あつねは日かげは丸く
ゆいあつねはあつね
あつねはあつね
あつねはあつね
あつねはあつね
あつねはあつね

相たがむつとくもく来ふのはな
しぬ中ふやないかいたさいたん
れもようくくはたなぬ仲の
かちとぬきやうはるん
れとちよんぽん
おつと思は忽よ身はさなれ

糸すごさ一人六臂月おその姿おほ

輕光
消たる姿をあはせはるもすつ汝は何人なるぞ

貞光
我君の仰の如く我をくしをあるはすまいか何と

かねと知る我の身のうへえやなや

うつらき山は年をへ世も若と

知る女郎もくしあふみの

かきーはさかみ^す冷^すかうける

次第ちう

を車

引けや引けー次あゝ雪の花
車ーらんちなるの染手綱いん
と着なした戀風折の烏帽子
狩衣男舞けふ今様の壽と

三指子おる庭

馬の舞前

すまの松風

祝ひかたづゝ。三ッ扇もれ舞扇
もたらゆくりは梅檀は二葉ぞ
冬れなるは山軍をフン渡せ
梢は霜の雪れ花冬至れ
梅れ色さうかきうゆのさ
花の袖何なるはひらうこたへ

いさう櫻もすがふ雪景色初
戀の人目恥し花紅葉忍ぶ
の山の下紅葉うすいはいや。戀
衣結ぶあははみさんけおな
かきではなはいな今宵逢ふ
合図は何ぞ妻戸叩かばたきも

いほで明けて霜夜の睦言も
只心なき鳥鐘よいと思ひのます
ふみ合鏡の比翼紋玉簾の内や
床も御所車よりへく筆に
思ひも文車返事うつく花車
うつくしくうつくしく花車積る

夜の通ひ車や雪車それく
忍ぶ車の君やわいあまの
車や戀車うつくしく
くも戀車うつくしくや
あふあ初雪の中に見
事な花乃鎗振の袂ふ

戀風がよるつとるつとく
しらとさんとき時雨は濡れ
初めと揃ふ鎗は手花の山
飾り立つる伊達なとりたう
只しつとるもたれふとい替はぬ
花の顔アサヤとらん繁昌か

はるきと賑ふ御代の里は新栄
千秋萬歳萬々歳と豊か
こは舞のまじむ

濱の松風

いはいいと思ひくればなり
かや船路長閑き海原や
四海の浪をみこ知る見れば
月を補ふ月を月は一影は
二つ満つ沙のよるべ満ち立ち

出でいざや汐をきき
磯馴松葉の煙三歳は
須磨の浦寄せはかゝるかなを
なみとれは行ふをまち候か
浪よちよち捨ふ舟ふかれに渡る
かゝるなま待けつらいとみなおや

人よけれも不思い待つ夜は樂み子
しめて根柢と二我の柢の中よん柢と
思のよんせん
もつゝ添寝の葛葛暮る心はすみ
なるとぞほりく宵やいと又かきめと
首尾を尺合せ逢ふ中よみの最早夜

中は權中納言さきも別は坂上の
是則き人への中立おふいこく
恨みのほろそ何もいはずみふた
みはきとほるみちれつらき
大ほの予里たくとちたのあ誘ふ
しも深いえろは在原丹葉平

三洋拍子お合榼

た頼めかなふ願も君の代の直成すむな
たのふ水釦の光り盡せぬなるの色
咲ます花の合榼よつらなる枝や
梅の香も名乗初たる百ちるる

三洋拍子
いかりは東夷と征伐なし給ふれ草子なるものと云ふ

源之助

東の東よりと尊き所を指し下向すは駿河也
頂は時雨の神無月二十日余りの下と云ふ
其の二圓びても赤沢の茂れ森の榼も木とてなるなり
源の海あり

の駒形やあめはやくすは町の
氷をわたる狐のこゝ小舟で夢れ

石
馬の馬前

枕箱夜風をよめる四布ぞん

柏崎うねね

三浦
千草百草を枕する
の雪れうね尾花

かみちの錦釣夜も月や柏るも

槌の三ろぞん

栗へせいのちとよめ
源のちとよ浦のちとよ

其の袖が浦~~浦~~浦やそん口舌の床の

袖屏風しん~~しん~~のちとよ~~のちとよ~~のちとよ

やけのちとよすな~~すな~~ねん~~ねん~~のちとよ~~のちとよ~~のちとよ

あゝ世のちとよ~~のちとよ~~のちとよは前の

すな~~すな~~のちとよ神さびて雲のよも

は~~は~~のちとよ結ぐし水もいたるの波の

佛の座天地五行やあらざいも

なつなせうもあづの女もさで

子代やいはふらんきふさけん
れはおらちめ野梅山梅さ
初たの袖れ一句の梅谷川
梅の去連はいつのうだ梅
結んていつとい結んては風の
つゝのきばよ鶯宿梅の物や

思ふとちう梅や品と拍子の子鞠
梅つゝといふ紅梅はかほ
りゆのき花のも

果ては月影梅はかきしんづくうみとけ

源のすぐやき

果ての乱やま

三つ丁々左右

源のきつゝの三の植

果てはかきしんづくうみとけ

海よりつるてふ由ふ

原運園三百二十榎

栗天運三千六百榎

原陰陽栗和合林

天運三千六百榎

栗天運三千六百榎

の又^ははる男方神をせじ陰のみね
の女神をたのみつゆげんた申あ

あぶ—きたへもまた—二つの榎免
さき—かうけ次第なり

楠公

馬ヶ岡前

を最後と九重の都を後手束弓馬

楠公



楠公の死

楠公の死

楠公の死

楠公の死

楠公の死

楠公の死



長唄芳村伊十郎	三味線杵屋六左衛門	笛 望月太左藏
長唄芳村孝三郎	三味線杵屋長三郎	小鼓 柏 扇之助
長唄岡安喜代八	三味線杵屋喜三郎	大鼓 柏 扇吉
同 富士田吉四郎	月 杵屋竹次郎	太鼓 福原鶴太郎

楠公

二張の弓は勢は月心むね中り三
尺の劔は光は霜腰に在り頃ときは
自半月の末一方楠判官正成は君は
仰を蒙りて一族郎黨五百餘騎合
を最後と九重の都を後手束弓駒

をば暫し櫻井の宿に止めて青葉蔭
嫡子帶刀正行を近く召て申けるはイカニ
正行聞きては獅子は我兒を千仞の
谷へ落して氣合を見るともや況て汝
は十一歳父の教も忘れたるや抑今度
乃合戦も天下分目の晴戦軍父は兵

庫に討死と心を決しては汝は是
より古郷へ疾々歸を促せば正行
涙せき何ぞ争で是より歸るべき
枉るも伴ひいへや正成心を勵ま
聞分の無き我子かな我なき後は
將軍は天下となりて日月は光を失

ひ申すべし汝一旦の身命を助らん
て敵は降りいひる生残りも郎
黨を扶持して再び旗を擧げ
敵慮を安しとすも是第に
孝行と形見よある恩賜は刀
正行之を押戴き泣き歸る後が

見送る父は鎧の袖より涙や
郭公聲を残して西東別れて
は下りけり

去程は淡路の瀬戸や鳴門は澳
霞の晴間を見渡せば數萬の兵
船漕つらね帆影は見ゆる山も

無一陸は播摩路須磨浦鷗越
の方よりニ引兩四目結輪違の旗
翻々と磯山風は吹靡の雲霞
の如く寄のけたる敵を前より正成は湊
川を陣を取ら敵と味方の関乃聲
簾の音はおとろきつ沖の鷗のちり

ちりばつと海陸一度は震動一
射出す征矢は秋の木葉打合ふ
太刀は電光石火群松原に樹がく
斗ふ菊水の旗ひがへし楠判官
正成と名乗つて戦ふ決死の勇將五
十萬騎は真中へ驅入々々三時よ

且合戦に人馬の息を休免けり
斯も所へ左馬頭新手を變て立
むふ正成兄弟物ともせず或は引
組み或は蹴ちらし一步も退ずたふ
し實に忠臣の鑑ぞと美名を

末世に残りけり

植本庵

杵屋版

明治三十五年三月吉日

女史松高砂丹前

今も初の旅衣く日暮行
末どく高砂や木の下
花は尉と姥松ももは
我んそも久しなぬ信吉の
此浦船は打乗て月ももふ

出遊の是は免でなき世のためし
老木のすがた引替へ妹脊わり
なき夫婦松葉色を同く深
緑に見ても思ひの盡せぬは誠
なりける戀衣けは戀は曲者
あまふ里をいづるもまた心

はさるやいけんすな朝な夕な
空吹風も落葉衣の袖ひき
もどる思ひのなはつたの身はし
寝ぐら小残の朧枕も見事
よちふつてぬるも花鑑は
雪のおぬるしらとちると白

鳥毛うけきぬれさどい袖はしら
ひら基笠きかさふて傘かさ戀風こいふうは
なびかんせんなびかんせんとのむこのむやん
と受うゑる柳腰やなぎこしあなやうふり
やりななめはかめゆらし
さの色いろあゆく入松いりまつの名所

はさまぐはあれ三保の松羽
衣えれ松まつはかけたる尾上おののへは
鐘かねよいぬいま夫婦ふうふまつ中なかつは
みみづれいいららししささの姫ひめ松まつ
二ふたいい三さんづいづい五葉ごえつは松まつ
幾代重いくだいしげん千代見ちよみ草くさあは

らやー海あをたの原の
波間よりいづれ出し神松よ
かんた玉にかるたる石陰を
せうんよりさうせすまは
千とせのみどり子にみろさす
かひたよは悪魔をはらひ

うつむ
雪の影

納る手は壽福をいだき
入る来る花の顔見せ由貴賤
の袖袂をうつるえきくの
こゝろをたのしむいぎなよ

正札附根元草摺

持重磯山お守ふくもきうや
たふ引す此初雨段けやう
さいはる瀧枝登る鯉龍
の如くもる智我の五郎村家ハ
けがおもたか代重鎧輕家

ひまげかけ出す免きまうも
又見えろる果裳裾もふつう
少林が手もかけろる鶴丸
た右の髭は天は凡昔も無
きやうどや力量より引もく
動力はくも村家笑て振る

いらぬうで立つよーや其の力有
もそうやゆめ仁王立たる勢は
る木もなびく鬼神や鬼をいばる
小林も今は心をやはらぐそやほな
力はおそれ間のついにさる
るんやー女子のふらふらなうてい

とぬ事。待夜するふんかぬ
とあるたふ枕のどきやうけさ
髪間まよ逢夜の力あるかぬ
中ねあふすも人目を閑け
うに思ひたはいはしきさを忘れ
る煙くぐん富士浅間そつと

と云ふは
事たる取付
てエウヤ
エウヤ

此のいへる顔はよら
引くもたせもあらや
髭たれ力ふね
せぬとなぞ廻り
あらみよ海にみ
しめ時ふれはきき
姉

蛙の聲も身も
おそと夢の間は
敵うんす物と
行んとする所を
留るとめともぬ
つよいけのひざり
なやい

おかしやんせ肩イチャ手ぬぐい深も
かまはぬ江戸もんまいます妙
ずんすぢぢなあらわ焼一に
とまらんせ。ますや五あらる
いほひはぢんだいもんせ
無双らだいむせわうばは

あづまゆらぶ二見深も移
しと神ゆめみも深く若者
や貴賤上下おなへおそめ
ゆいとなかうり

ナンチレミ

トチセ
トチミ
トチ
ツシ

なむむねやみせのいあはれ
ゆめれよりくゆめぬは
あんにやかは申しもふ
このほそながれちよく
あの一すぢらふみ外は
あふさひのあふなたる
何れもぬれあふをきゆ

るものゝかゝるばなみだるかすく
まもなりてほあゝぬ月かげよ
あゝのぶそねよめはなゝ成ほそ
ゑんをむすぶの神とん取河
げらけしうはゝもあやまる
いらかぬちづゝやゝすもね
うづで汐るむよりも君の心

は取もいさくもたぬはあゝ
おもはんせしゆすもいふも
ひぢまるよりもぬーのふに
もいさくもたぬはあゝ
おもはんせしゆすもいふも
まゐはるせしゆすのちりく
ちりくはしきもあつた

なめめの雪ぞちりくも雪ぞ
ちりくはしきもあつた
もつらひはなもあつた
かゝりはしきもあつた
かゝりはしきもあつた
けんけんけんけんけん
かけりけんけんけん

つらやうき上くらがねの
牙のみならうほろなく
三六廿一の其の間くらう
くらうおひ通うくらうは
はしとくははれぬたすく
我きみくらうなみたなうらう

其九續新四季桜

奥書

なだよりはよそのをしづからが
わたのあは燕ぶくらむもた初
室のひさしく残る雪間と
踏みタケくらと忍へばちは
だし百夜と通へ思ひのまへ

アあたれとやのじむすびも夢
にまっ娘いもう祢がちふ年月
しめぐる事のやとん事のわれが
ふと志まひれてまがと下る
アもうもなやこそ毎さきに
アまことふ名もはつがくつむ
笑顔ふ神屏風いたみし夜

着いそれなりになれい膝と
わづつもの乱るいよと清さつ一
触いかりたろ夕霞たふたれ
ぞやアしてきてる小事の袖の
句もなまめかし玉なき肉や
ゆかしきぬぞゆかしき一重あ
やむのちぎりしとち束の文とや

リ初子のつぎぬ思ふとぞ（款）
つとばわのしごふにたごん初め
こはよそにくさぬ真実しづ
しで結成ぶらん糸なひき
やきさう心移もとあつ問はる
くせつさへ惚れたが身外女
来は夜半の軒端の梅のめせ

ひとむらさくと春雨のしらそで
かぶすしじい笠もかきみき
の三重の帯

（二）
丁惟

ありやんやん
りやんやん
酒たがもくれまた一せんふは

れてさるねいく夜の怪曲しる通ふ
千鳥不酒樽とさびてふり
舟のさき水の重るよふな前のみ
しらと無細工で裁れたから思へ
ば鬼・念佛があつて焼く色
けりう食けにまける新道と騒
ぎちらしてあつてける日あたり

の比叡下遊びの仲や入り大坂前
しひつあやうな世の仲よくし
あんなんえんなん女がたまはく
らくうだいこえんちやはんきい
ぞあんないびんきいあんな
うたうつあいようつあい
あうあはうたらきうせん
の

まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう
まやうまやうまやうまやう

えんなおまの胸をなぐと知らづ
午どくととととととととととと
振るも代まの縁の下家より日向に
かこふわらのな根井の柱の住めし
てくらすしあやさんしつのもんな
よめいしや御座んせぬとくま
たりこればさつとつと御座めふ

朝の六つからずんぐと、思ふま
改題のさそふてつれしゆい死す
うはだり〜おちてお屋の水がし
を鼓と一ゆめにせんのもまうみよ
のらへるハの四里四方とせぬゆい
いき有りがたきゆりせり〜めり
なゆりせりだふすてきなゆりせり

だれお生だ〜箱有さんゆりせ
うだ〜いたうえんといはむの
不〜よりきある日のもあま〜ゆ
午まろる箱太鼓あまうゆふこ
うのよとしゆや

(三) 西

ひらなでからやのうすあみん

リのおふにふみとふの徳む
まじさ事と起さきてしるぬ
枕ふけつめいづく太鼓も
ふりといひ付あつ付ひちりた
西でならふ東でならふ思ふ
星へふいぬふ雲のかげもし
てんしとんころつちんがらと

ちんがらとんがらちんがらこふしや
りとせやちし下母のふしや
なふそ天やふはれなりで
すらしは夏の日のあしうも
ふらしやふふそと三まじなる
ふのちるこそあやしけしあだ
なふめ彈き木調子なむすは

はこれなるがさきはけうしひま
わたるいづくされんをちこは
あうなうらうかはうのあ月様
一輪づまとふゆめはしるひ
かきしるくえる姿やちこ
んで二雨やさめもかよするし
かろふ是非となや村雲と

ふふ雲のあめたうふゆだ
してあうりくあう月
あやまふかりける月とあは
やあし村雲はあすまといし
名い様かきするほむにてん地の
もあるとふふ事はけし時うそ
まうけるえんすあふいかりや太

勢の拍子取りどんやん
えんやけーかめつくぬき
らけいないふでしるまにつて
やりた^いふそのぬき^いんか^いち^いぶ
た鍋のへ^いならやこれのま^いた^いせ^い
りのぬき^いがゆ^いか^いた^い条^いち^いや^いの^いん^いで^い
よくば^いら^いば^いす^いま^いが^いわ^いく^いせ^いく^いと^いち^いん^いの^い

ぬき^いと^いく^いた^いめ^いで^い萬^い年^いも^いち^いつ^いら^い
へ^いく^いた^いぬ^いが^いし^いも^いか^いく^いせ^いも^い
こ^いし^いら^いさ^いは^いま^いの^いお^いさ^いち^いや^いめ^い
んと^いあ^いさ^いち^いさ^いし^いも^いち^いつ^いら^い

俄う

まもるひな神いまおもひよせ
たらみやすめすゝるなでる
ふもどくちもよりけせん
せいあらびうかりくてふわ
いな人は代はめでふたなり
なへふわいな人は代はめで

たのさんさ若松様さかしよ枝もさかえ
て葉もあけらかま浦はなん
なへかまうふはるあはれ松
かつんはいたなみよあねの花が
咲いやりしより来りける兼ふえ
くるはの色ふべいらんちの道
中は雪のすあーの雪の顔や

ひさるわん久

い今ほころいみだれにすのまつや
まおもひのたねよいつのころよりあひ
なれそめてかおふころをかわひと
思へさうはくあめわん久ほこれ
さくつじみのかはよのふほんにあんで
此身はこれさくうちえんだかくこい

ぢのぬれころいさういうちよま
いならぬつきにむらくもはな
かぜまかさほりのたねはなうそ
いたふあはななんのちのしみ
あろふぞいほんにいれと夜がまみし
いとよからねるもぐちうたり
ちすぶまつやまにあつたや見たや

くるりがよいそのきぬぐのおもか
げにとど合こたへし志よんぼりとかじ
に似たるすかたのよしやこひゆ
へふかきおにひはほろほろみ
はしかなければめたぐれぬこひ
のぬかひにあみだば^合しうきながほり
のめざくらぬれつかよかいたちぼり

きみをおひばかちほだし一夜のめ
あはねばひよつとまよめたすそや
おづまにをらくほろくろわと
いめはのほしかのひがしかの^合あつち
かこちちかすしろがじしろかのあ
くおしるてたくとまおし志と
ねのくさまくらゆめのよのなかゆめ

の世のたのめ

狂^ふ雪^ふ吹^きの雛^{いた}形^{がた}

実^みや船^{ふね}きそふ堀^{ほり}江^えの川の^みみ
な^なぎはにきいつ^{いつ}なくは都^{みやこ}
島^{しま}それけなにはへこれ^{これ}はまた名^な
にしあづまの花^{はな}なれや花^{はな}の顔^{かほ}見^み
世陽^よ氣^きたつなみち^{みち}ち^ちよするい

そに^そむら^{むら}村^{むら}今^{いま}島^{しま}みだ^{みだ}き^きて
あそ^あむ^むわ^わき^きもい^いざ^ざ乱^{みだ}れ^れ心^{こころ}のやな
き^きがみ^みち^ちら^らり^りバ^バち^ちら^らり^り雪^{ゆき}
のふ^ふれ^れや^やつ^つれ^れや^や思^{おも}ひ^ひぞ^ぞつ^つれ^れ
外^と山^{やま}八^は重^{ちゅう}山^{さん}端^は山^{さん}に^に月^{つき}の^のふ^ふね^ねは
に^にし^しへ^へとい^いり^りて^てけ^けり^り春^{はる}前^{まへ}に^に雨^{あめ}あ^あつ^つ
て^て花^{はな}ひ^ひら^らく^く事^{こと}は^はや^やし^し秋^{あき}後^ごに^に霜^{しも}相^あ

な^らくして落葉おそし色とろ
ま^らの^にしき見よやれしぐとに
雨にかざすこぢがさそてがさ小
笠^の忘に人目とせまぢのかさは
くがざすあふぎの手しとの
しなよ^はつとこらふくあし
のよとばどふしとくくる
くるひのきやいしんぐ狂ひあず
こそおししろや

なうして海菜を
きらうてしき見ふやうにと
あにかずいぢやうそてがさ
なうに目とせきぢのかさ
かたもあふぢのちしもの
うたふちのちしもの
うたふちのちしもの

早稲田大学図書館

011688994553